

きけいろまじりたり、あしすゝめよりされいにてつめ志ろし、さゑづりすこしあり、めづらしきるいなり。

にうないすゞめ　ゑがひ　すりゑあは、ひゑ、米、

大きさすゞめにて、かしらのあかみ色よく多し、其外すゞめににたり、さへづり諸事すゞめに同事。

〔閑田耕筆〕雀の子飼はよく人に馴るものにて、放飼にするに安し、或は人の肩に登り懷にも入り、又庭の樹木にも遊ぶ苦しげも見へず、よきものなれどもあまりに馴て人の足もとにまとひ、あやまちて踏殺すことのあるがかなしと人いひき、此飼雀にふと酒糟を喰せたれば頓て死たりとか、さらば雀には限らず、鳥類には大毒なるが人の心つかぬこと也。

〔日本書紀二神代〕天稚彦之妻下照姫哭泣悲哀、聲達于天、是時天國玉聞其哭聲、則知夫天稚彦已死、乃遣疾風舉尸致天便造喪屋而殯之、卽以川鷹爲持傾頭者及持帚者、又以雀爲春女。

〔三代實錄三十四陽成〕元慶二年七月甲午朔、是日立秋、早旦雷聲隱々、至未一刻忽發一聲、其勢非常、○中略

大藏省奏霹靂於倉前陣木有黃雀含口蒼虫而死、腹毛燐爛。

〔左經記〕長元四年八月四日己卯、侍從中納言移著南座、召吏仰曰、依宇佐宮恠異、可有軒廊御卜也、○中略傳聞自去五月二日至于晦比宇佐神殿上、雀群集或作栖云々、仍有此御卜、而官申云、本所火事疾疫云々、寮申云、天下疾病若御藥云々。

〔續世繼數島の打聞〕實方中將の御はかはみちのおくにぞ侍なるとつたへき、侍しまことにや、藏人頭にもなり給はで、みちのおくのかみになり給て、かくれたまひにしかば、このよまでも、殿上のつきめのだいばんすへたるをばすゞめののぼりて、くうおりなどぞ侍なる、實方の中將の頭になり給はぬ、おもひののこりておはするなど申も、まことに侍らば、あはれにはづかしくも、